

## 支部長挨拶

### 大学英語教育学会の「社会的責任」

支部長 木村友保 (名古屋外国語大学)

大学英語教育学会が任意団体から社団法人となった。森住会長によれば、これで以前にも増して、私たちの学会は社会に対して「責任が重くなった」という。社団法人化の必要性を感じたのが学会の財政的側面であった事実を考えれば、多くの会員が想像できるように、それは学会が財政面でより透明性の高い団体になるべき義務を負ったことを意味する。お金にまつわるスキャンダルが横行している昨今、私たちの支部もそれに協

力していくべきだと思う。しかし、私たちの学会がまず果たすべき「社会的責任」とは財政的側面だけではないと思う。支部会員の皆様とそのことを確認しておきたい。

私たちの学会は「英語教育」に従事する専門家の集まる学会である。教育現場ではみんな「先生」と呼ばれる。では「先生」とはどういう人々を指すのか。私は「先に生まれた生徒」と解釈している。つまり、英語学習という難物に取り組んでいる「学習者」で、今もその学習の難しさを感じながらも、それに挑戦している人々のことである。つまり、「英語教育に従事する専門家」とは「英語学習に従事する専門家」であるとも言える。よって、英語のネイティブ・スピーカーでも自らの母語使用を「ことばの学習」と位置づけて学んでいないものは、「英語教育に従事する専門家」とは言い難いし、逆に、英語を教える日本人でも、ことばの学習を怠っている人は、英語教育の専門家とは言えないことになる。

英語という「ことば」の学習に関連して、最近よく言われるのが「国際英語」である。今や英語を母語とする人々の数よりも英語は母語ではないが、必要であると主張する人々の数が増えた。その結果、いろいろな「英語の変種」も英語の一つとして認めていこうという。インド人の英語、フィリピン人の英語、そして、日本人の英語もあってしかるべきである、と主張する。「国際英語」を World Englishes といい、「英語は一つ」という主張から「いろいろな英語」があつてしかるべきであるという方向に変わってきた。折しも、今年度の全国大会ではこの「国際英語」についてのシンポジウムがあつた。パネリストの一人で、この大会の象徴的な存在でもあつたジェニファー・ジェンキンス氏は「国際英語」は、英語が母語である人たちも学ばなければならない「英語」であると言う。私もこのような英語の存在を認めるが、それは社会言語学的な研究対象としてのことばであつて、学習の対象、いや目標となることばであるとは思っていない。そうすべきではないとさえ思っている。

私が考える英語学習の目標とは、ピーター・ミルワード氏が主張するように、「英語文化」に対して堂々と貢献できるほどの英語力（つまり、英語で語り、英語で書く力）をつけるべく、英語を聞き、英語を読めるような学生を一人でも多く生み出し、自分たちもそうでなければならないと信じている。そしてこれが大学英語教育学会の果たすべき真の「社会的責任」であると思う。

## 目次

大学英語教育学会の「社会的責任」	木村友保	1頁
25周年記念大会を終えて	塩澤 正	2頁
FEELTAとAILA 2008	津田早苗	2頁
「言語テスト国際学会」LTRC 2008 参加報告	大石晴美	3頁
研究会紹介 待遇表現研究会	津田早苗	4頁
講演会報告 大津由紀雄氏	鹿野 緑	4頁
CyberSpace 「PERCコーパス」	石川有香	5頁
会計報告	鹿野 緑・大石晴美	6頁
会員フォーラム 現実世界の Elvish とは何か	大森裕實	7頁
掲示板	支部紀要編集委員会	8頁
事務局より	石川有香	8頁

## 25周年記念大会を終えて

塩澤 正 (前支部長、中部大学)

第25回 JACET 中部支部研究大会は去る6月14日(日)中京大学に於いて、約150名の参加者を集めて開催された。ご承知のようにこの大会は2つの意味で重要な大会であった。一つは中部支部創立25周年の記念大会であり、一つは JALT 中部地区4支部(岐阜、名古屋、豊橋、三重)との初めての合同大会であった。

評価は程度の差こそあるだろうが、総合的には記念すべきいい研究大会になったのではないだろうか。いくつか印象に残っている点を挙げてみたい。

まず、参加者の数である。毎年中部支部大会は80名~100名前後の参加者数があるが、今年は150名もの参加者があった。JALT や JALT 大学教育研究部会(CUE)の参加者が総参加者数を普段の約2倍に押し上げた。その殆どがネイティブスピーカーであるため、さながら小さな国際大会の様相であった。これを見越してか、ケンブリッジ大学出版など海外の出版社を含め、14社もの英語教育関係各社の展示があった。この数は普段の数倍にあたる。

次に研究発表の数である。ワークショップを含め28件もの発表があった。これも普段の倍以上の数である。シンポジウムと講演を含めれば丁度30件になる。しかも、2つを除きすべて英語での発表であった。2011年の50周年記念全国大会から全国大会を国際学会と位置付け、基本的に発表言語を英語にするという本部の考え方を先取りする試みであり、中部支部がその可能性を強く示したと思う。

最も印象に残っていることは、「似て異なる」二つの大きな英語教育学会が、一つの研究大会を成功させるために協力したことにより、互いに多くを学んだということである。この2つの団体は、予算も規模も構成員も異なり、必然的に物事の運営方法が異なる。このギャップを埋めるために、JALT と JACET は合同役員会を3回、インフォーマルなミーティングを2回開き、さらに連絡事項を電子メールでお互いの役員間で常に交換するようにした。その結果、互いに新しい研究大会の運営方法やアイデアを学んだ。コーヒープレイク、ワークショップ、タイムテーブルの入った25ページに及ぶ2色刷りのプログラムブック、マルチメディアでの広報活動などは、その成果である。JALT が実践的で JACET がアカデミックであるというイメージがあるが、これもかなり実態とは異なっていることも分かった。その発表を実際に聞いた人たちは、JALT も JACET も両方がかなり実践的であり、かなりアカデミックな研究をしていることを理解したはずである。

この運営プロセスは、お互いに「柔軟な発想」で、相手の立場を尊重しながら歩みよるといふ、まさに大会テーマである「英語教育におけるシナジー効果を求めて」を具現したものであったように思う。時間とエネルギーが余分にかかる作業であったが、その達成感

は余りあるものであった。JALT 中部地区4支部の支部長は「JACET 中部」に大変に感謝し、全国ニューズレター(1st JACET/JALT joint regional conference, Nagoya, LTL Vo. 32, 11: 28))でも、全国研究大会の研究発表(The interweaving of JACET and JALT 2008 Pac 7, Tokyo)でも、この経験を JALT の仲間に伝えている。彼らにとってもいい経験(rewarding experience)であったことがわかる。これを一度の試みで終わらせることなく、何年かに一度程度の割合で、再度合同支部大会を開くのも JACET 活性化の一つのアイデアではないだろうか。最後に、協力を惜しまなかった JACET と JALT の役員の皆様に、再度この場を借りて、感謝申し上げたい。

加えて、25周年記念事業として『JACET 中部支部25周年記念論文集』も会場で配布されことを追記しておきたい。編集の労を取ってくださった中京大学の吉川先生と東海学園大学の津田先生、投稿してくださった方々、挨拶文を寄稿してくださった会長・副会長、中部支部の元支部長、各支部支部長に改めて感謝申し上げる次第である。

## FEELTA と AILA 2008

津田早苗 (東海学園大学)

2008年度に参加・発表をした2つの海外の学会の様子をお伝えしよう。

1つ目は6月26日から28日までロシアのウラジオストックの The Far Eastern National University で開催された the 14th NATE(the National Association of Teachers of English) and the 7th FEELTA (the Far Eastern English Language Teachers Association) Conference である。

FEELTA は、1995年に創立され1年おきに国際大会を開催してきた。2回の内一回はウラジオストックで開催され、1996、2000、2004年に次いで2008年にウラジオストックで開催された。FEELTA は2001年に PAC(the Pan-Asian Consortium)の5番目のメンバーになり、海外の学会とも連携を深めている。PACには KOTESOL (Korea TESOL), JALT (the Japan Association for Language Teaching)はじめシンガポール、フィリピン、タイなどの英語学会が名を連ねており、相互に交流をしている。

新潟から飛行時間90分というウラジオストックの近さが示すように極東ロシアはヨーロッパに近いモスクワとは異なりアジアとの結びつきが強く、アジアの諸地域からの参加者も多い。ロシア人の英語教育関係者に加え、ロシアで英語教育に従事する欧米の英語教育関係者も積極的に参加し、研究発表の分野も英語教育全般にわたっている。欧米からの著名な招待講演も多く、JALT との関係から招聘された Tim Murphy 氏の講演会場は満員で入りきれないほどであった。2006

年に中京大学で開催された第12回 IAWE 大会の基調講演者 Zoya Proshina 氏も FEELTA の中心メンバーである。氏とは2005年北京での Asia TEFL 以来の旧交を暖めることができた。次回、2010年大会はハバロフスクで開催されるとのことなので、JACET との交流も更に深まることを期待したい。

もう一つの学会は8月24日から29日までドイツ、エッセンで開催された the 16th International Conference of Applied Linguistics である。AILA は3年毎の開催で、2002年シンガポール、2005年ウィスコンシン州マディソンに次いで本年はドイツで開催された。AILA1999にはJACET が総力を結集し取り組んだことからわかるように AILA の日本の提携学会は JACET であり、今回も多くの JACET 会員が研究発表、パネルなどで活躍をした。

私は JACET 待遇表現研究会から参加した4人の内の一人として研究発表を行った。今回の学会は会場が2箇所に分かれ、地下鉄で移動をしなければいけなかったため、聞きたい発表をすべて聞くにはかなりの計画性が必要であった。基調講演者には Jim Cummins 氏、Jennifer Jenkins 氏など著名な講演者が名を連ねていた。

ドイツの学会ということで、風光明媚な風景を想像してドイツへ向かったがエッセンはルール工業地帯の中心地であり、機能的ではあるが一般のドイツのイメージとは異なっていた。学会会期の1日が周辺の観光に当てられ、ケルン大聖堂を見ることができたことは収穫であった。歩いている人に英語で道を聞いたり、一般の店舗で品物について英語で質問してもなかなか英語が通じない経験をし、観光地域ではない都市におけるドイツの一般の人々の英語に対する意識の一端を見たような気がした。次回2011年の大会開催地は未定のようなのだ。

(追記: AILA 2011 の開催地は北京の Beijing Foreign Studies University (BFSU) に決まったそうです)

## 「言語テスト国際学会」 LTRC 2008 参加報告

大石晴美 (岐阜聖徳学園大学)

2008年6月23日から28日にかけて、浙江大学 (Zhejiang University、中国・杭州) にて、the 30th Annual Language Testing Research Colloquium (LTRC 2008) が開催されました。杭州は、13世紀の旅行家マルコ・ポーロが『東方見聞録』で「世界で最も美しく華やかな街」と絶賛しているとおり、西湖周辺は美しい景色が続いています。その美しい景観を損なわないためか、ホテルから学会会場までの往復途中いたるところに、リヤカーや自転車でダンボール、木切れ、落ち葉などのごみを集めている人たちが目に留まりました。

そのような美しい場所、そして、「東洋のケンブリッジ」と呼ばれる浙江大学での LTRC 2008 に参加しま

した。LTRC は言語評価論に関心を寄せる研究者達が盛んに議論を繰り広げている国際学会です。今年のテーマは、"Focusing on the Core: Justifying the Use of Language Assessment to Stakeholders" で、記念講演、受賞講演、シンポジウム、ペーパー、ポスター、works-in progress による発表がありました。

記念講演では、1998年に逝去された Samuel J. Messick 氏 (Educational Testing Service) の功績を記念して J.D. Brown 氏 (ハワイ大学) が、"Why don't the stakeholders in language assessment just cooperate?" のタイトルで、"stakeholders-friendly test" (受験者、評価者、テスト業者などすべての関係者を配慮したテスト) を作成する難しさと妥当性、信頼性の高いテストの必要性を我が国の英検のプロジェクトを紹介され主張されました。講演に先立ち、木下徹氏 (名古屋大学) による講演者紹介で、Brown 氏の豊かな経歴が紹介されました。

また、本学会で Lifetime Achievement 賞を受賞された Charles Alderson 氏 (University of Lancaster) による受賞講演では、ご自身がテスト受験者だったところを含め、過去50年の人生におけるテスト研究と今後の展望について興味深いお話が伺えました。

ペーパーセッションでは、L. Backman 氏 (UCLA) が、第二言語で、たとえば、数学や科学の分野で試験を受ける場合に、試験の結果が言語能力ではなく、どの程度、学問的専門知識として反映されるのかという点に着目されていました。

わが国からは、R. Koizumi & A. Hirai が、スピーキングの評価方法で、Story Retelling による方法と他のタイプによる方法を比較した発表など、さらに、中部地区からは、T. Kinoshita & H. Oishi が、学習者の母語が印欧語と非印欧語の場合に着目し、テストを受験するときの認知的な負荷の違いについて脳の活性状態から報告しました。

大きな世界大会とは異なり、発表場所は300席くらいの会場が1部屋とポスター会場のみ。その分会場からは、真に迫った活発な質問、意見などが飛び交い、世界的な言語テスト研究が向かう方向性、発展性、問題点などを感じることができました。尚、今年の応募件数は228件、採択件数は73件でした。2009年は米国 Denver, Colorado で開催されます。



## 研究会紹介

### 待遇表現研究会

津田早苗 (東海学園大学)

1994年に本研究会を創立した堀素子氏の退職に伴い、2008年4月より津田早苗が代表となった。副代表は従来どおり名城大学村田泰美氏である。設立当初の会員は堀氏だけであったので、1995年に加わった村田泰美氏、1996年からの津田が初期のメンバーとなった。

当初はそれぞれの会員が待遇表現に関係した研究テーマを追求する形をとっていたが、1999年早稲田大学におけるAILAでのシンポジウムでの発表以降は一つのテーマについて共同研究をする形をとるようになってきた。特に2003-2004年度の科学研究補助金の助成を得てから、会話データ収集とその分析を行なうためにメンバーを固定化し、集中的に共同研究するようになった。2005年には研究成果公開促進費の助成を受け、研究会の研究の集大成としての『ポライトネスと英語教育』(2006)を出版し、大学英語教育学会賞学術賞受賞の榮譽に浴したことは記憶に新しい。堀素子氏の前向きな姿勢・強いリーダーシップの賜物であろう。

2008年前半の主な活動はドイツのエッセンで開催されたAILA2008での研究発表であり、研究会の4人が参加した。大学英語教育学会全国大会では研究発表を1名が行なった。今年度前半は研究会の一部の会員が翻訳書を出版する作業を行ったり、海外での研究に従事したり、発表を行ったりしたが、全体としての活動は比較的少なかった。今年の後半に入り研究会に新しい会員が加わり、第二世代の研究会の一步を踏み出したといえる。入会当初は大学院生であったメンバーも所属大学での重要な役割を担うまでに成長し、研究会のために集まり、共同研究をする時間が制限されるようになった反面、それぞれが専門性を持ち、独立した研究者の集まりとなってきた。当面の目標としては2009年メルボルンで開催される国際語用論学会でのシンポジウム発表を目指し、会話データ収録・分

析などの研究会活動を行なう予定である。JACET研究会としての自覚を持ち、研究成果を英語教育に反映するために全国大会・支部大会にも積極的に参加しようと同張り切って研究会活動を行なっている。(研究会の活動は<http://happy.ap.teacup.com/zunda/>に公開されている)

## 講演会報告

### 「小学校英語 - わたくしが一貫して 反対する理由(わけ)とわたくしの代案」

大津由紀雄氏(慶應義塾大学)

2008年10月25日

(南山短期大学外国語研究センターとの共催)

去る10月25日(土曜日)、南山短期大学外国語研究センター公開講演会で、慶應義塾大学言語文化研究所所長の大津由紀雄氏が小学校英語について話されました。初等教育における言語教育に係る者としての立場から、報告をいたします。

大津氏がこれまで一貫して小学校英語に反対論を唱えてきたことは、小学校英語是非論をめぐる3部作や教育再生懇談会あての要望書などからも広く知られています。今回の講演会で、大津氏は国が示す公立小学校の英語教育政策の根本的な誤りを強調されましたが、初等教育に外国語を取り入れること自体には具体的な反論をしていません。鳥飼久美子氏(立教大学)との共著に「こうなる前にもっと真剣に大反対しておけばよかった」と書いておられる通り、まず「英語が使える日本人」の育成のための戦略構想(2002年)および行動計画(2003年)の批判的検証を求めています。つまり、小学校の言語教育のねらいは、経済界の要請に応える形で、英語コミュニケーション力(労働力としての英語力)を数値評価を基準にして育成することではありません(カッコ内報告者)。初等教育のあり方や教育理念そのものを歪めてしまいかねないからです。現状では、教員養成が正式に始まっていない状態で、専科教員もなく、適切な教科書もないまま、見切

## 成美堂 2009年 新刊案内

<b>Speaking in Public</b> 総合教材・自己表現 ----- 1,900 円(税別)
<b>Styling Corporate Messages</b> 総合教材・企業紹介 --- 1,900 円(税別)
<b>Science Square</b> 総合教材・科学 ----- 1,800 円(税別)
<b>Reading Expert 1</b> 総合教材・速読・リティング ----- 1,800 円(税別)
<b>Welcome to BBC on DVD</b> DVD 教材・トキモノ別 ----- 2,300 円(税別)
<b>Tune up for the TOEIC® Test Listening</b> ----- 900 円(税別) リスニング 副教材・TOEIC®
<b>Scaffolding</b> 英作文・英文法 ----- 1,900 円(税別)
<b>Living Grammar</b> 英文法・リティング ----- 1,900 円(税別)
<b>Access to Simple Englis</b> 英文法・リティング・web 学習 ----- 1,900 円(税別)

<b>Meet the World 2009/2010</b> 時事英語 ----- 1,900 円(税別)
<b>Made in Britain</b> リーディング・イティング事情 ----- 1,800 円(税別)
<b>Essential Approach for the TOEIC® Test</b> ----- 2,000 円(税別) TOEIC®・総合教材
<b>The TOEIC® Test Practice with Core Vocabulary Book 2</b> TOEIC®・総合教材 ----- 2,000 円(税別)
<b>Pharmaceutical English 1</b> 薬学英語 ----- 3,000 円(税別)
<b>Children's Garden</b> 保育英語 ----- 2,400 円(税別)

株式会社 成美堂  SEIBIDO

〒101-0052 東京都千代田区神田小川町3-22

TEL 03-3291-2261 / FAX 03-3293-5490

URL: <https://www.seibido.co.jp> e-mail: [seibido@seibido.co.jp](mailto:seibido@seibido.co.jp)

り発車的に小学校英語が始まることについて強い懸念を示されました。英語一辺倒であることにも言及がありました。これらが、大津氏が反対する主な理由（わけ）のいくつかです。また、小学校英語教育と児童英会話・早期英語教育を混同してはならないという指摘もなされました。非常に説得力のある反論です。

大津氏は、このような反対理由をふまえて、「英語」のかわりに「ことば活動」を導入すべきだという代案を出されました。母語で十分にことばへの気づきを促す、英語学習へとつなぐ、英語学習を通してさらに気づきが起こるという図式です。講演後の質疑応答は活発で、現職の教員の方たちや将来教員になることを目指す学生たちから多くの質問やコメントがありました。そのなかで、言語発達において外国語が母語のじゃまになることはないだろうという見解を大津氏は示されました。

最後に、報告者の私見を述べます。気づきと考える力を養うような母語と外国語教育との連携こそが初等教育には必要だと思います。しかし、気づきだけが目標なのではなく、新しいことばで実際に誰かと何かを伝え合うことができる力が必要です。伝えあう力は大切です。また、子どもたちには、ことばの決まりを引き出して、当てはめる力をつけていってほしいと思います。いまや、「小学校英語」というラベルには、是非論や文部科学省の不十分な政策の名残が見え隠れするように感じます。実際のところ、公立小学校では英語を通して子どもたちの何を育てるのかということについて、初等教育にふさわしい言語教育の理念や目標が設定されているとは到底思えません。私立と公立の政策を単純に比較することはできませんが、いっそのことそのラベルを捨てて、新しくプルリリングの視点からゆたかな「初等教育における言語教育」の可能性をさぐる方向にシフトしてはどうでしょうか。

鹿野 緑 (南山大学)

理系の ESP 教育・研究への活用が期待される質・量ともに優れた科学技術論文コーパスが、日本の研究者グループを中心とする学術団体である PERC (Professional English Research Consortium) によって構築され、本年 6 月 25 日にインターネットを通して公開された。以下、PERC コーパスの特徴を紹介する。

#### 1. テキストデータ選出基準の設定

PERC コーパスは、質の高い論文テキストを収集する基準として、インパクトファクター値を用いており、医学・数学・物理・化学・通信工学など理系の 22 分野において、引用率が高い学術雑誌に掲載された論文をデータとしている。

#### 2. 世界初、世界最大規模の科学論文コーパス

これまでに科学論文に特化した質の高いコーパスは存在しなかったが、PERC コーパスは、総語数で約 1,700 万語を有し、量においても、公開されている科学技術英語コーパスとしては、世界最大規模とされる。

#### 3. 著作権の処理

コーパス研究では常に著作権の問題が付きまとうが、PERC コーパスではすべてのテキストが許諾を得て収集されている。

#### 4. 言語研究のための加工

科学技術論文テキストでは、図表をはじめ、機械的な処理に不向きな数式や記号が多く使用されている。PERC コーパスでは、これらをすべて丁寧に取り除いている。また、BNC と同様の POS (Part of Speech) タグも付与し、言語研究に適したデータに加工されている。

## 南雲堂の英語テキスト

ご審査用見本請求はこちらから <http://www.nanun-do.co.jp>

### 2009年度新刊 木村友保先生のテキスト!!

<時事英語・リスニング>

#### NHK WORLD NEWS : Global Perspectives

#### NHK ワールド・ニュースで学ぶ『聴く英語、読む英語』

木村友保 / NHK国際放送局監修 B5判 104頁 CD付 2100円(税込)

NHK ワールド・ニュースとともに時事英語を完全マスター! 3段階のリスニングパートで時事英語に慣れ親しみ、必須の英単語を確認。リーディングパートでトピックニュースを完全理解! 全24章、各章4ページ構成。

### 片野田浩子先生 大好評 TOEIC シリーズ!

<TOEIC>

#### A shorter Course in TOEIC Test Listening 450, 550, 650

K(カタノダ)メソッドによる5分間 TOEIC テストリスニングシリーズ

#### A shorter Course in TOEIC Test Reading 450, 550, 650

K(カタノダ)メソッドによる5分間 TOEIC テストリーディングシリーズ

サブテキストに!  
半期用教材として!  
使い方多様、大好評5分間シリーズ  
B5判 各735円(税込)

〒162-0801 東京都新宿区山吹町 361 南雲堂 TEL03-3268-2311/FAX03-3269-2486

5. 使いやすい検索インターフェース

小学館コーパスネットワークが Web 上で提供するコーパス検索サービスの SAKURA を使用して検索ができる。SAKURA は、BNC、Wordbanks on line などでも使用されており、英語研究者にとってはなじみのあるインターフェースである。

PERC コーパスは、2009 年 6 月まで、試験的に無料公開されており、以下の URL でメールアドレスを登録すると ID が配布され、誰でも使用できる [http://www.corpora.jp/~perc04/index\\_j.html](http://www.corpora.jp/~perc04/index_j.html)。ESP 教育や研究に携わる者だけでなく、理系の専門教員や大学院生が論文作成時に気軽にコーパス検索ができるシステム作りが今後も期待される。

JACET 中部支部会計報告

1. 2007 年度決算 (3 月 31 日現在)

【収入の部】(円)

前年度繰越金	187,985
中部支部基金より	932,743
会費	
本部から	675,200
支部独自	0
大会費	
参加費	0
展示料	0
広告料	0
印税	0
研究会補助費	100,000
雑収入	
受け取り利息	1,839
雑収入	58,000
合計	1,955,767

【支出の部】(円)

事業費	
通信費	253,983
印刷費	1,153,205
研究会補助費	200,000
支部大会運営費	288,487
会議費	6,334
管理費	
人件費	0
事務局費	53,758
雑費	0
予備費	0
合計	1,955,767

【決算の部】

2007 年度収入 2007 年度支出 残高  
1,955,767 - 1,955,767 = 0 (円)

2. 中部支部基金収支報告

2007 年度決算 (3 月 31 日現在)

【収入の部】(円)

前年度よりの繰越金	932,743
受け取り利息	1,488
合計	934,231

【支出の部】(円)

通常予算へ (利息は別費目)	934,231
合計	934,231

【決算】

2007 年度収入 2007 年度支出 残高  
934,231 - 934,231 = 0 (円)

3. 2008 年度予算

【収入の部】

会費	
本部から	675,200
支部独自	0
大会費	
参加費	0
展示料	20,000
広告料	0
印税	0
研究会補助費	100,000
雑収入	
受取利息	0
雑収入	63,000
合計	858,200

【支出の部】

事業費	
通信費	90,000
印刷費	60,000
研究会補助費	200,000
支部大会運営費	330,000
会議費	15,000
管理費	
人件費	20,000
事務局費	110,000
雑費	10,000
予備費	23,200
合計	858,200

鹿野 緑 (南山大学)

4. 2007 年度 JACET 中部支部大会収支報告 (JALT との共催)

【収入の部】(円)

運営費	
支部大会運営費	270,000
中京大学より助成金	50,000
大会費	
参加費	13,500
展示料	60,000
JALT 負担分	59,000
雑収入	
懇親会余剰金	7,000
合計	459,500



## 【支出の部】(円)

### 事業費

支部大会運営費	
印刷費	57,750
通信費	33,033
会議費	8,146
講師料	10,000
講師交通費	46,500
人件費	82,000
弁当代	26,000
手土産代	3,360
演壇用花代	10,500

合計 277,289

大石晴美 (岐阜聖徳学園大学)

## 会員フォーラム

### 現実世界の Elvish とは何か

大森裕實 (愛知県立大学)

本ニューズレター第20号に *The Lord of the Rings* に登場する Elvish Language について記載したが、それはあくまでも Tolkien の描く架空世界において elf 族が話す言語であった。ところが最近では、国際共通語としての英語という観点から「ELF の話す言語はどのようなものか」ということが議論されるようになった。

Jennifer Jenkins (現 Southampton 大学教授) はその嚆矢となる著書 *The Phonology of English as an International Language* (2000) の中で English as Lingua Franca (ELF) という概念とその中核となる音韻 Lingua Franca Core の習得を提唱した。この精神は最新刊の *English as a Lingua Franca: Attitude and Identity* (2007) にも貫して看取できる。前著については『JACET 中部支部紀要』第5号(2007)掲載の「書評」において紹介してあるので参照されたい。Jenkins は第47回 JACET 全国大会(2008)の記念すべき keynote speech において同様の主張を開陳したことで我々の記憶に新しい。

この趣の議論では nativelikeness の追求を是とするか非とするか、或いは当該概念そのものの存在の有無を視野に含めて、一定の結論を導くのが困難である。世界の人口の4分の1程度(約14億人)が英語話者数であると推定すると、L1としての英語話者数が4億人程度であるのに対して、L2としての英語話者数も4億人程度、FLとしての英語話者数は6億人程度に達すると David Crystal は指摘する (*The Language Revolution*, 2004)。そうした英語話者人口のみで量的に判断するならば、BrE や AmE は少数派ということとなり、どういう形式が intelligible (判読可能) であるかないかを決定する特権をもつ native speaker に解かっ

てもらふ努力を nonnative speaker 側が専一に行なうという一方的な過程を必要としないということになろう。EIL の脈絡において nonnative listener が普通に存在すること、また、nonnative speaker 同士の意思伝達も普通に行なわれるという視点が従来欠如していたと批判することは、一面において正鵠を射ている。英語の"国際化"という概念は"判読可能性"をもつということの意味している。すなわち、文法・語彙・綴り・発音・慣用語法等の面で、英米語いずれかの標準(RP や GA) に偏らない"合意された基準"が必要とされるということを含意するのである。そしてそれを Lingua Franca Core (LFC) と呼び、その習得が必須であると Jenkins は指摘する。

しかし他面、L2/FL 話者が目標言語と定める英語習得の究極の目的は何か。鈴木孝夫のいう"交流言語"の習得に他ならないと断定できるだろうか。確かにその側面は無視できないが、現在でも L2 話者の多くは Kachru のいう Inner Circle の国々に留学や移住をして、学問や就労を成り立たせるために英語学習を行なっていることが圧倒的ではないか。真摯にして熱心な心的態度で英語学習に取り組む良質の L2 学習者が存在することは経験的事実であり、彼らにとって適切な英語音の習得は切実なものであるといえる。このような環境において、nonnative speaker の L2 話者が関与する重要な相手は、逆説的にも L1 native speaker であることは想像に難くない。Inner Circle の国々において、nonnative speaker 同士が英語でいくら意思疎通できたところで、肝心の留学や就労を完結することはできない。その意味では、L1 native speaker にも EIL の視点をもって権威主義には一定の是正を施してもらいたい——LFC を L1 話者にも共通知識として理解してもらいたい——とするのは L2 話者側の主張ではあろうが、話者人口数だけで標準発音モデルを決定する権利を獲得するというのは、人工言語の創造でない限り、現実的ではなく、むしろ受け入れ難いのではあるまいか。

現実世界における現代版 Elvish の創造と獲得は、指輪の助けの有無にかかわらず、それほど容易なことではない。

ご登録はお済でしょうか

会員制サービス【金星堂 E-SPACE】をオープンいたしました。

容易な見本請求、各種教授用素材提供など様々なサービスをご用意しております。

今後はよりサービスを充実させてまいります。

是非、小社 HP よりご登録ください。

<http://www.kinsei-do.co.jp>

金星堂

東京都千代田区神田神保町3-21 (〒101-0051)  
電話 03(3263)3828 FAX 03(3263)0716  
E-mail text@kinsei-do.co.jp  
URL <http://www.kinsei-do.co.jp>

## 掲示板

### 『JACET 中部支部紀要』第7号掲載論文募集について

2009年12月発行予定の『JACET 中部支部紀要』第7号の原稿を以下のように募集します。ふるってご応募下さい。

原稿締め切り：2009年8月20日（変更）

提出先：JACET 中部支部事務局

投稿規程：『JACET 中部支部紀要』第6号巻末及び、  
JACET 中部支部ホームページに掲載  
中部支部紀要編集委員会

### 事務局より

#### ◆ 12月定例研究会のご報告

2008年12月13日（土曜日）に、中京大学にて定例研究会が開催されました。研究発表（4件）と研究会発表（1件）の後、大阪大学大学院言語文化研究科の日野信行教授によるご講演が行われました。フロアからも活発な質問・意見が寄せられ、有意義な時間となりました。

#### ◆ 2月定例研究会のご案内

2009年2月28日（土曜日）に、名城大学名駅サテライト（「名古屋」駅ユニモール地下街4番出口を出てすぐ）にて、定例研究会を開催します。言語アセスメント研究会による研究発表や、名古屋大学大学院国際開発研究科の木下徹教授のご講演も予定しています。プログラムの詳細は、1月末頃お知らせします。

#### ◆ 2009年度中部支部支部大会のご案内

2009年6月6日（土曜日）に、名古屋外国語大学にて、2009年度JACET支部大会を開催します。大会テーマは、「国際的視野から見た英語教育の羅針盤」です。研究発表をご希望の方は、氏名・所属（共同研究者全員）、発表題目、概要（日本語300字または英語200語）を事務局まで、メールまたは郵便でお送りください。申し込み期間は1月1日～2月28日です。なお、メールの場合は、表題を[JACET 支部大会申し込み]としてください。

#### ◆ 新入会員の紹介

2008年4月より2008年12月までの中部支部所属新入会員は以下の方々です。（敬称略、入会順）

赤羽美奈子、福元有希美、長尾明子、宮浦国江、Quinn, Kelly、宇都宮隆子、鬼頭修、伊與田洋之、藤田卓郎、陳淑茹、諏訪純代、小町将之、天野修一、池田周、園部秀行、平松昭子、鈴木基伸、三浦孝、奉鉦京、大澤聡子、藪田由己子、室井美稚子、久米和代、杉浦恵美子

#### ◆ 支部役員の紹介

大学英語教育学会（JACET）は予てより社団法人化の準備を進めておりましたが、2008年8月15日をもって、社団法人大学英語教育学会となりました。法人化に伴い、中部支部からは、2名の理事と15名の社員が選出されました。詳細は「JACET 通信 No.165」をご覧ください。また、法人化により、2008年度の中

（所属・敬称略・abc順）

顧問	田中春美
支部長	木村友保
副支部長	清水克正
幹事	石川有香（事務局・総務）、 伊藤光彦、大石晴美（会計）、 大森裕實

#### 研究企画委員

Adamson, John、馬場景子、石川有香、伊藤光彦、片野田浩子、小宮富子、倉橋洋子、村田泰美、丹羽義信、大石晴美、岡戸浩子、大森裕實、佐藤雄大、鹿野緑、清水克正、下内充、津田早苗、山中秀三、吉川寛、若月剛、  
支部紀要編集委員  
倉橋洋子（委員長）、小宮富子、大森裕實、  
下内充、塩澤正、山中秀三、吉川寛

#### ◆ 事務局変更のお知らせ

2008年6月15日より支部事務局が名古屋工業大学石川有香研究室に移動しました。支部運営についてのご意見ご要望などございましたらお気軽にお寄せ下さい。なお、JACET 関係のご連絡につきましては、メール表題に[JACET 中部]とお書き添えてくださいますと幸いです。

#### JACET 中部事務局

〒466-8555 名古屋市昭和区御器所町  
名古屋工業大学 石川有香研究室  
メール宛先： [ishikawa.yuka@nitech.ac.jp](mailto:ishikawa.yuka@nitech.ac.jp)

#### ◆ 全国大会予告

第48回（2009年度）全国大会は、北海学園大学豊平キャンパスにおいて、9月4日（金）～6日（日）の日程で以下のテーマで開催されます。

「国際交流「新」時代における大学英語教育カリキュラム刷新」

### JACET-Chubu Newsletter 第21号

2008年12月20日発行

発行者：大学英語教育学会中部支部

木村友保

編集者：石川有香 佐藤雄大 片野田浩子

カット 吉川愛友